

国際会計基準委員会評議委員に就任して



公認会計士

田近耕次

はじめに

本年5月に国際会計基準委員会（IASC）の評議委員（Trustee）に任命され、目下、その任務を果たすべく努力をしている。この「絆」の紙面を借りて、評議委員任命までのいきさつや、就任以来これまでの活動の状況と、そこから得られた感想などを述べてみたい。

就任までの経緯

評議委員就任についての意向の打診があったのは年初のことであった。当時は日本の会計制度に対する信用が失墜していた時期であった。それに加え、評議委員選任の役割を担う7人の指名委員会（Nominating Committee）メンバーが今年の12月に選ばれたのだが、その中に日本からの候補者が入らなかったことで、国際会計基準を巡る動きに対して、日本が閉め出されるのではないかと、という危惧が広がった。評議委員会は、国際会計基準委員会の運営の全般に責任を持つ最高の機関となるので、そこにも日本から代表を送れないような事になれば、重大な事態になるという認識で、行政当局、経済界、会計士協会などの関係者の取り組み方には真剣なものが感じられた。

このような状況下で、評議委員候補者として名乗り出るのは重い責任を背負うことになるという感

じを持った。このような国際機関の評議委員には、どのような基準で選ばれるのか見当もつかなかったが、私のこれまでの経歴や経験が基準を満たす可能性が少しでもあるのであれば、私としては職業会計人としてのキャリアの終盤にさしかかっている身でもあるので、この時期に社会貢献が出来るのであれば幸いなことであるという心境であった。

選考の途中の段階で、私と、三井物産の副社長である福間年勝氏の名前が新聞で報道されたので、世間の注目を集め、落ち着かない時期を過ごした。しかしながら幸いにも二人そろって選任されることとなり、ひとまずは責任を果たせたのかという感じがした。しかしながら、後で分かったことであるが、日本から二人を選ぶということには反対もあり、いろいろな力関係のバランスが幸いに有利な方向に振れたというのが実状のようであった。国際社会の難しさを見たような気がする。

就任以降の動き

評議委員の当面の主な仕事は、国際会計基準委員会の運用資金を集めることと、国際会計基準設定に携わる、14人の理事を選考する事である。日本においては、資金集めを福間氏が主として担当し、私は主として理事の選出の仕事に関わって

いる。

資金集めに関しては、年間約20億円の資金が必要であって、当面、向こう5年分の資金手当をしようという目標である。目下、Big-5、多国籍企業、証券取引所、国際金融機関などの利害関係者に、どのような割り振りで、どのようにアプローチしてゆくかについて検討を重ねている。日本の場合には、国内の会計基準設定機関設立の資金集めと重なるため、両者をどのように整合性を持たせるかについても、議論をしている。

理事については、6月にすでに議長となるDavid Tweedie氏を選んでいるので、残りの13人をこれから選ぶことになる。13人の理事の選出に関しては、8月の下旬にWall Street JournalやFinancial Timesの広告やIASCのホームページで候補者の募集をした。また各国の行政当局や、会計士団体などに候補者の推薦を依頼した。候補者の受付は9月16日で締め切ったが、13のポジションに対して200人を超える応募者があった。200人のすべてを面接するわけにゆかないので、書類選考で人数を絞っていわゆるショートリストを作成して、その人達について評議委員が面接をすることになっている。面接は、ニューヨーク、ロンドン、東京の三カ所で行われ、私は東京での面接に参加した。

執務雑感

Trusteeのメンバーは、Big-5のトップ、多国

籍企業の会長、政府機関の要職などの経験者から成っているので、それぞれに見識の高いこと及びバランス感覚に優れていることが感じられる。特に議長であるVolcker氏の迫力はさすがである。

理事候補者の選考で感じたことは、やはり日本では、国際舞台で通用する人材が少ないということである。このことは、会計士業界、実業界、学会のいずれについても共通した現象であった。一番の問題はやはり語学の壁である。会計基準策定に関して、知識、経験の豊かな人材は大勢居るが、十分な語学の能力を兼ね備えた人材が少ないというのが現状である。もう一つの問題は、日本の雇用関係の閉鎖性と、働いている人達の組織への帰属意識が強いことである。IASCの理事になるには、出身母体から完全に離れることと、理事の職務が終わった後にも、元の出身母体には戻らないという、いわゆるノーリターン・ルールというのが適用されるので、これが一つの阻害要因になったようである。このことは特に、企業からの人材の登用を難しくした。これらのことは、理事の候補者に、自薦他薦を交えて200名を越える応募があった中で、日本からはわずかに2人の応募に止まったことに象徴されている。

グローバル化の波が押し寄せてくる中で、日本の経済力に見合った参画をしてゆかなければならない時代を迎えて、言語、習慣、社会制度の違いから来る、我が国の抱える問題の大きさを改めて感じさせられた。

第21回日本公認会計士協会研究大会の報告

北陸会
松下勝八



1. 大会の規模

去る7月28日に、金沢市において全国から775名の参加（うち会員・準会員は550名）を得て行われました。その際の主催者（北陸会）の実行委

員会の一員として最初から最後まで関係したので、ここにご報告いたします。

大会の日程は、恒例により、27日の前夜祭に始まり、28日の研究発表・記念講演会・記念パ

ーティ、29日から30日にかけてのエクスカージョンで終わりました。

2. 研究発表の内容

研究発表は5会場で行われました。詳細については協会からの冊子にてご覧いただくとし、ここでは簡単にご報告いたします。

第1会場は、「環境報告書保証業務の現状と課題」のテーマで3人の会員の報告でした。今後、公認会計士も、環境報告書の社会への浸透・作成実務の定着とその健全な発展のために、協会を中心にこの分野で何らかの具体的な動きを見せていくべきであるとの主張でした。

第2会場は、「情報技術の発展と公認会計士の役割・責任」のテーマで長尾慎一郎会員の報告でした。ITについての関心が高いため参加者が多く、会場は満席となりました。特に、若い会員には好評でした。

第3会場は、「北東アジア諸国における経済環境と公認会計士」の題目で、日・露・中・韓の四ヶ国の大学教授又は会計士の報告でした。この報告は、北陸会の特色を出すために設定されました。環日本会圏を攻勢する国々の会計・税制の紹介とその課題について聞くことができたことが、日頃米国サイドの話ばかり聞いている者にとっては清涼剤の感がありました。

午後からの第4会場は「21世紀経済社会に連結納税制度が果たす役割」の題目で、5人の会員の報告がありました。協会の租税調査会のメンバーの方々の発表でありましたが、わが国ではまだ税制として認められていない連結納税ですから、企業組織再編・活性化の要となることはわかって、その理論の実現には道程が遠いように思われました。

第5会場は、「企業ディスクロージャーの方向性と監査」-利用者へ価値ある情報の提供を目指して-との題目で、4人の方の報告がありました。この報告も北陸会の担当ということで、有価証券報告書の利用状況と同書への期待をアンケートしたことから出発したのですが、日本経済新聞が

とりあげたように公認会計士の思っているほどには機能していない、という実態調査結果からの研究発表でした。

3. 記念講演

5会場の研究発表が終了した後、記念講演が行われました。講師は、作家の五木寛之氏でした。その要旨は、次のようなものでした。

「人間を観察すると快活で何の悩みもないかのように明るくみえる人がいる。でもその人は意識しないにせよ、心の底に「憂い」を抱えて生きているのである。君子は感動するだけではなく、背後に一抹の憂いがあるのが本当の君子であるといわれる。韓国には“恨（ハン）”という古い言葉があるが、それは恨みという意味ではない。心の底にある様々な痛み・悲しみで心からみついたものの意味であり、人はそれを乗り越えて生きなければならない。心の中に抱いているそれが時に頭をもたげ背中へのしかかってくると、背中を丸めてハート溜息をつくことで元気を取り戻すことができる、といわれる。ロシアでもブラジルでも、同様に人々の心にあるなんともいえない憂いのような感情を込めている言葉がある。日本人も憂いを感じるはずであるが、これを表す適切な言葉をずっと探し求めていたが、「ものごのあわれ」は適切ではない。大学の先生、NHKも使わず、今は死語になったが、「暗愁（あんしゅう）」という言葉が適切である。平安時代以来使われてきた言葉であるが、明治維新から人々に使われだした。明治の人のキーワードは暗愁である。坂の上の雲を目指して坂の下の雑草の痛みを感じつつ、欧米の真似をして上滑りをして矛盾を感じつつもそうせざるをえず、坂の上の「雲」は永遠に手にすることができない。そこで、人々は地位・業績だけでなく心に暗愁を抱きつつ生きる人を立派な人間として尊敬した。心の奥が深い人間が明治の人達であった。しかし、この言葉は、永井荷風が昭和20年に日記に使ってから、忽然として姿を消した。以後日本人は泣くべき時に泣かなくなり、暗愁を捨てて心の渇きを評価し、経済大国・技術立国とい

う二つの目標を目指してきた。戦後50年の節目近くで、阪神淡路大震災、オウム真理教事件が続発し、物も心もともに支えにはならないことがわかった。何を支えにするのか見出せないまま数年間を経過し、第二の坂の上の雲を目指すこともできないで目標を失っている。平成10年の自殺者は32,863人であり、自己破産者を経済的な自殺者と見ると約10万人もいる。交通戦争の比ではなく、我々はこれを何戦争といえよいか。“心の戦争（インナー・ウォー）”であり、今が有事である。人間の命が軽くなり、心が渴いている。陰惨な事件が続発しているが、我々は、活力・復活という言葉があるように、オアシスのように社

会と魂に水を注ぐ必要がある。日本人は憂いを感じないままで50年間失速した。今、情報の時代といわれるが、情報は数字だけを伝えるのではなくて、人の情を報じることが重要である。最近、暗愁を感じる昔の歌謡曲が歌われるなど希望的な芽生えもある。どうか人間らしく暗愁を抱いて生きて、困難を乗り越えていただきたい。

4. むすび

この「絆」の読者の皆様をはじめとして、多くの会員のご協力により、大会が比較的好評を得て終了できましたことをお礼申し上げます。

[第12回CPAゴルフ十月会]

平成12年10月15日CPAゴルフ会の第12回大会がグレートアイランド倶楽部にて開催されました。今大会の結果は以下のとおりです。

	グロス	ネット
優勝	早稲田大学 78.5	一橋大学 71.9
準優勝	明治大学 80.0	明治大学 72.6
第3位	専修大学 81.0	中央大学 73.0

(注)数字は平均スコア

受験生活を振りかえって

私はこの度、運よく公認会計士第二次試験に合格することができました。

私は在学中は法学部に在籍しており、入学当時はまさか自分が公認会計士試験に挑戦することになるとは思ってもみませんでした。

しかし、公認会計士試験の制度改革によって民法が選択科目として選べるようになったこともあり、法学部出身の者にも公認会計士試験挑戦への門戸が開かれたといえるでしょう。

そこで、どうして公認会計士試験を目指したのかという動機、そして実際に合格してみようということについて述べてみたいと思います。

法学部法律学科平成8年度卒業

神 杉 香 奈 子

公認会計士試験を目指した動機について

私は大学に入学した当初から何か資格を取得したいという気持ちがありました。

就職状況が、特に女性にとって厳しいものであったということに加え、将来的に独り立ちできる仕事に就きたいと考えたからです。

法学部に在学していたこともあり、検討の結果、司法書士試験の受験を決意、大学卒業の年度の平成8年に二度目の挑戦で運よく合格することができました。

卒業後も勉強期間があったこともあり、精神的

には大変つらいものであったことをおぼえています。

大変な思いの末、やっと合格することができたのですが、ここで新たに超難関の国家試験である公認会計士試験を目指すことを決意したのは次のような理由からです。

第一には、これから社会に出ていくにあたって、法律だけではなく会計の知識も身につけた方が仕事の幅も広がり将来役にたつと考えたからです。

第二には、試験科目の中に商法があり、また民法が選択科目に加わったことにより、法学部出身であることで少し有利な部分もあると考えたからです。

実際に合格した今、思うこと

今年は、10月5日に公認会計士試験の合格発表があり、現在は約1ヶ月が経とうとしています。

私は10月10日付けで某大手監査法人に採用さ

れ、その後ガイダンスや入所手続き、新人研修、パソコン研修を経て、先週は初めてクライアント先に往査に行きました。

初めての往査でいろいろな戸惑いもあり、勉強不足であることをさまざまな面で痛感させられた1週間ではありましたが、公認会計士試験に合格した喜びをひしひしと感じた1週間でもありました。

公認会計士の職業領域はこれからも次第に広がっていくことでしょう。苦しい受験生活を乗り越えて手に入れるフィールドとして不足はないと思います。

受験生の皆さんが公認会計士試験に合格され、一緒に仕事のできる日を楽しみにしています。

最後になりましたが、今まで支えてくださった諸先生方、そして家族に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。

二次試験に合格して

商学部会計学科4年

吉田 剛

私は平成11年4月に中央大学商学部会計学科に編入学致しました。幸運にも、この度1回目の受験で公認会計士第二次試験に合格することができました。僥越ながらこの場をお借りしてこの1年半を振り返ってみたいと思います。

私の場合、中央大学に編入学をする以前は獣医学科に在籍しておりました。怪我によって進路変更を余儀なくされたときに今までの人生であまり勉強をしていなかった私は、自分の興味のある経営学や経済学の分野で自らを試してみようと公認会計士受験を決意しました。

受験を志したときに既に24歳でしたのであるべく短期の合格を自らに課し、また両親からも課せられることとなりました。しかし、専門学校の

みで勉強するのではなく、多くの会計士としての先輩方が学ばれた中央大学商学部とのダブルスクールを選択しました。その理由としましては、会計について何一つわからない自分が会計学科、しかも著名な先生方の多くいらっしゃる中央大学で学ぶことが自らの勉強の幅を広げることになると考えたからでした。

編入学に先立って1月から専門学校で勉強を始めましたが、4月からの生活は考えていた以上に大変でした。月曜日から金曜日までに大学の講義が18コマあり、そのうち4日は夜に専門学校の授業がありました。さらに土曜日に専門学校が2コマ入っていましたのでかなりハードな毎日でした。体力的にも精神的にも3年生のときはかなり

辛かったです、専門学校の「試験用の知識」だけではなく、大学で「会計学の片鱗」に触れたことは二次試験に臨む際に大きな力となって私を助けてくれました。

幸いにも3年生の時の試験を稚拙な答案ながら先生方が評価してくださり、4年生になってからは週に1度ゼミに出席するだけで、会計士の試験に集中できることになりました。試験直前は精神的に不安になる時もありましたが、試験で全ての力を出し切ることに集中して頑張りぬくことができました。

この1年半、常に考えていたのは短期の目標と

長期の目標を持つということでした。長期の目標は勿論合格ですが、そればかり考えていると、不安になったりついだらだらしてしまいます。短期の目標として翌日の答練などを視野に入れ一歩一歩確実に前進することを心がけていました。

今回幸運にも合格できたのは私一人の力では到底成し得たものではなく、多くの方々のご指導やご支援の賜物であると考えています。この場を借りて皆様に御礼申し上げるとともに、今後の一層の研鑽を心に誓う次第です。また、多くの後輩が後に続くことを祈りこの拙文を締め括らせて頂きたいと思います。

平成12年度事業計画（平成12年4月から平成13年3月まで）

- | | | |
|------------------------------------|---------------|----------|
| 1. 公認会計士第二次試験合格者への記念品贈呈 | 4. ゴルフ等懇親行事 | 平成12年10月 |
| 2. 中央大学講演会講師派遣
経理研究所主催
商学部主催 | 5. 会報の発行 | 平成12年12月 |
| 3. 総会及び懇親会 | 6. 会員名簿の改訂版発行 | 平成12年12月 |
| 平成12年6月15日 | 7. 研修会及び新年会 | 平成13年1月 |

平成11年度収支決算及び平成12年度収支予算（単位：円）

I. 収入の部	平成11年度決算額	平成12年度予算額
1. 会費収入	1,431,230	1,600,000
2. 総会懇親会収入	240,000	400,000
3. 講演会等行事収入	352,000	300,000
4. 同好会収入	0	100,000
5. 受取利息	1,824	2,000
収入合計	2,025,054	2,402,000
II. 支出の部		
1. 総会関係支出	517,770	500,000
2. 講演会等行事支出	600,366	600,000
3. 会報関係支出	314,690	300,000
4. 学生奨学関係支出	582,410	600,000
5. 対外関係支出	125,405	200,000
6. 事務費用	62,448	200,000
7. 雑支出	50,726	100,000
支出合計	2,253,815	2,500,000
当期収支差額	△228,761	△98,000
前期繰越金	1,199,157	970,396
次期繰越金	970,396	872,396

会費振込のご協力ありがとうございました。本年度もよろしくお願ひします。

以上

平成12年公認会計士第二次試験 出身大学別合格者数

1位	(1)	慶應義塾大学	132名	8	(7)	京都大学	28名
2	(2)	早稲田大学	90	9	(-)	神戸大学	27
3	(3)	中央大学	60	10	(9)	法政大学	23
4	(3)	東京大学	50	10	(-)	関西学院大学	23
5	(6)	同志社大学	37				
6	(5)	一橋大学	35				
6	(8)	明治大学	35				

()は前年順位、日本公認会計士協会の調査による

平成12年公認会計士第二次試験合格者

経理研究所関係 (39名)

氏名	学部・学科	在・卒	ゼミ
高橋 陽介	商・会計	00.3卒	石崎ゼミ
浅海 治人	商・会計	00.3卒	河合ゼミ
兼重 正嗣	商・経営	96.3卒	—
鈴木 雅也	商・会計	00.3卒	石川ゼミ
白髭 英一	商・会計	00.3卒	石川ゼミ
鶴巻 智規	商・商業	00.3卒	—
座間 陽一郎	商・会計	98.3卒	檜田ゼミ
野村 光裕	法・法律	97.3卒	—
安藤 智子	商・会計	97.3卒	北村ゼミ
村上 武志	経・経済	99.3卒	高田橋ゼミ
松田 修一	商・会計	99.3卒	北村ゼミ
高橋 宏治	経・産経	00.3卒	—
柳澤 麻貴	商・会計	99.3卒	北村ゼミ
家田 敏明	商・会計	98.3卒	檜田ゼミ
渡邊 克己	経・経済	90.3卒	吉村ゼミ
山口 和之	経・産経	00.3卒	小口ゼミ
福岡 雅樹	商・会計	00.3卒	河合ゼミ
田中 彰人	商・会計	98.3卒	—
竹内 麻貴	商・経営	99.3卒	林ゼミ
郡司 昌恭	商・会計	00.3卒	河合ゼミ
岡本 進	商・会計	00.3卒	北村ゼミ
小池 恭子	商・会計	4年在学	矢部ゼミ
武村 香	商・経営	00.3卒	北村ゼミ
糸井 拓也	商・会計	4年在学	北村ゼミ
國兼 裕士	商・会計	99.3卒	北村ゼミ
前野 信哉	商・会計	3年在学	石崎ゼミ
田島 照夫	経・産経	4年在学	高田橋ゼミ
伊藤 ゆかり	商・会計	4年在学	北村ゼミ
岡本 周二	商・会計	5年在学	北村ゼミ
高橋 久美子	商・会計	4年在学	北村ゼミ
益子 理絵	商・会計	4年在学	北村ゼミ
鈴木 澄子	商・会計	99.3卒	北村ゼミ
川村 啓文	商・会計	97.3卒	—
田中 洋子	商・会計	3年在学	石川ゼミ
相澤 貴純	商・会計	98.3卒	木下ゼミ
武川 俊之	商・会計	4年在学	矢部ゼミ
東 敏文	商・会計	96.3卒	—
岩田 有司	商・経営	97.3卒	冨塚ゼミ
川野 武志	法・国際	98.3卒	福原ゼミ

経理研究所関係以外 (21名)

氏名	学部・学科	在・卒	ゼミ
藤原 伸裕	経・経済	93.3卒	一河ゼミ
林 恭子	商・会計	94.3卒	川北ゼミ
河野 昌和	商・会計	94.3卒	檜田ゼミ
澤邊 夏奈子	商・会計	00.3卒	木島ゼミ
石井 利明	法・法律	92.3卒	—
神崎 時男	商・会計	95.3卒	長谷川ゼミ
伊奈 真弓	商・会計	97.3卒	白鳥ゼミ
三浦 善明	商・経営	94.3卒	及川ゼミ
松本 貢弘	商・会計	97.3卒	白鳥ゼミ
江添 慶範	商・会計	91.3卒	—
前田 徳子	経・公共	97.3卒	—
金杉 喜文	商・会計	96.3卒	木島ゼミ
山本 洋平	経・経済	99.3卒	古都ゼミ
吉田 剛	商・会計	4年在学	—
貫井 大輔	法・法律	4年在学	—
相原 史明	商・商業	99.3卒	—
田 炯収	商・会計	94.3卒	—
神杉 香奈子	法・法律	96.3卒	加美ゼミ
辻 武司	法・通信	98.3卒	—
太田 昌景	法・政治	00.3卒	—
坂井 淳一	経・国際	90.3卒	林ゼミ

中央大大学公認会計士会会報「絆」の第7号をお送りします。忙しい中ご寄稿いただきました先生方に厚くお礼申し上げます。

今年の公認会計士業界にとっての十大ニュースの1番は、「海外での日本の会計制度に対する信用失墜」でないかと思います。そこで今回「国際会計基準委員会」の評議員に就任され田近先生に、就任の経緯及び信用回復のために今後なにをすべきかを寄稿していただきました。

一方、中央大学公認会計士会にとっての十大ニュースの1番は、「母校の公認会計士第二次試験

合格者が60名」ではないかと思います。大学及び経理研究所他関係者のご尽力の賜物であり、来年は更なる合格者の増加を期待したいと思います。

北陸会の松下先生には、7月に開催された第21回日本公認会計士協会研究大会の状況をご報告していただきました。ご参加された会員も多かったとお聞きしております。

来年はいよいよ21世紀、会員の皆様が今年同様ご健勝で一層ご活躍されることを期待します。

中央大学公認会計士会報 No.7

平成12年12月3日発行

発行人 中央大学公認会計士会会長

川 島 正 夫

発行所 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-11-5

中央大学駿河台記念館内

中央大学経理研究所気付